仮名本『曾我物語』の方法

——「惟喬・惟仁の位あらそひの事」を通して——

小井土　守敏

〈一〉

惟喬惟仁の位争い譚は、『平家物語』「名虎」として知られる説話であるが、『曾我物語』においても、巻第一で源氏の系譜を繙く端緒として引用される。その概要は、文徳天皇の第一皇子惟喬親王と第二（第四）皇子惟仁親王の皇位継承争いに、東寺の真済と比叡山の恵亮がそれぞれ祈りの師として法力を争い、勝敗が惟仁方に劣勢になるに及んで恵亮が「なづき」を砕き、ついに惟喬方に逆転勝利して皇位継承者となったというものである。位争いについては、相撲または競馬、あるいは双方で争われたとする等のヴァリエーションがあり、『曾我物語』と『平家物語』の長門本・南都本・「盛衰記」は、その後日談を備えている。なお、源氏の代々を語るその筆頭としてこの説話を引用する『曾我物語』に対して、『平家物語』では、高倉天皇の第四皇子が第三皇子を越えて即位し、後鳥羽天皇となる件の先例として引用される。

この位争いについては、史実として裏付けられるものがなく、『平家物語全注釈』[1]は、「相当興味深く作られた俗説であろう。伝承文学としてあったものを、採択したものと考えられるが、特にその出所を知らない」とし、水原一氏は「相撲・競馬等の競技賭占が虚構であることは認めざるを得ないようである」としながらも、恵亮祈祷及び位争いの事実についてはその可能性を否定せず、類似の状況——なんらかの賭占のような競技——が行われていても不思議ではないとする。[2]

この時の、文徳帝から清和帝への譲位を契機として、清和帝の外祖父である藤原氏が台頭してゆくこととなり、惟喬親王方の紀氏や大伴氏は、以降藤原氏の勢力に席巻されていってしまうことは周知のことである。つまり、この時の皇位継承が、貴族社会の勢力図を大幅に塗り替えたことは史実として認められてよい。すなわち、この譲位にまつわる事柄自体に「説話」化されていく原動力は内包されていたのであり、事実、『江談抄』（巻二）を筆頭に『古今集注』『職原抄聞書』など、説話や中世の注釈の世界にこの説話は多く見いだすことができる。[3]なお、二人の親王による皇位争いにふれる最も早い作品である『江談抄』では、惟仁の祈りの師を東寺の真雅僧都としている。勝利した惟仁方の祈りの師を比叡山僧恵亮に改変していくところに天台系の介入を見ることができるとも指摘される。[4]

軍記物語は、それぞれの主題にそって、種種の説話を取り込みながら物語を展開していくものであり、ある特定の説話が複数の作品に取り込まれることは珍しいことではない。本稿では、この位争い譚の実否や正誤を質そうとするのではなく、そうした説話を『曾我物語』——主として仮名本——がどのように取り込んだか、特に『平家物語』の取り込み方と比較検討することによって、仮名本『曾我物語』の説話の取り込みの方法を考えてみたい。

〈二〉

『曾我物語』と『平家物語』の惟喬惟仁位争い譚の記事を対照すると、次表のようになる。[5]

まず、位争いが行われた時期について相違がある。『曾我物語』は文徳帝の在位中にいわゆる東宮立てを争うことになっているが、『平家物語』にお

○…該当記事　◎…重く扱う　▽…軽くそえる

記事		平家物語 延慶本	平家物語 長門本	平家物語 闘諍録	平家物語 盛衰記	平家物語 南都本	平家物語 屋代本	平家物語 覚一本	曾我物語 真名本	曾我物語 真名本訓読本	曾我物語 仮名本
時機	文徳在位中	○	○		○	○			○	○	○
	崩御後			○			○	○			
競技	競馬		○（対等）	○（対等）	▽	▽	▽	▽	◎	◎	◎
	相撲	◎	○（対等）	○（対等）	◎	◎	◎	◎	▽	▽	
恵亮礼讃の成句				○	○	○	○	○			○
後日談	「三超」落書		○								
	真済憤死					○			○	○	○
	真済怨霊		○			○					
	小野宮籠居				○	○			○	○	○
	業平和歌								○	○	○
	惟喬往生								○	○	
	清和帝出家								○	○	▽
	文徳の真意と応天門事件		○								
	維経（惟喬外祖父）憤死				○	○					
	男山八幡勧請								○	○	
	源氏祖先								○	○	○

いては諸本間で異同がある。位争いの競技については先にもふれたが、『平家物語』が全般的に相撲に重きを置き、『曾我物語』が競馬に重きを置いていることが分かる。「恵亮礼讃の成句」とは、いわゆる「恵亮砕脳・尊意振剣」のことで、惟仁方を勝利に導いた恵亮の法力譚を、そうした成句や格言のようなことばで評しようとするのは、『平家物語』では主に語り本系であり、『曾我物語』では仮名本である。

『平家物語』諸本の多くは、ここまでで説話を区切り、物語時間――兄を越して践祚した後鳥羽天皇の話題へと戻っていく。しかし、『曾我物語』

は、法力争いに敗れた惟喬方の真済僧正の憤死、惟喬の、業平との交流を含む籠居のさまを述べた上で、清和帝から源氏の系譜を説いていくこととなる。なお『平家物語』でも、長門本と南都本が真済と惟喬親王の後日談を備えているものの、『平家物語』と『曾我物語』との大局的な相違は、やはり位が争われたのは相撲によるのか競馬によるのか、そして位争いの敗者の後日談を備えているかどうかということになろう。

〈三〉

まず、『曾我物語』が、この説話――特に後日談を備えていることでどのような解釈を与えられてきたかを見ていきたい。

日本古典文学大系『曾我物語』[6]の補注には、

> 文徳実録や三代実録をみても、惟喬親王と惟仁親王との関係が、それほど深刻なものであったとはきめられない。しかし、後代の文芸では、二人の皇子の位争いが、きわめて陰惨な物語となっている。弟の惟仁親王が、皇位の継承者となったのに対して、兄の惟喬親王は、失意の生涯を送らなければならなかった。しかも、惟仁親王すなわち清和天皇の系統は、次代の陽成天皇で絶えてしまったのである。あきらかに惟喬親王の御霊とはいわないが、その祟りの恐れられる状態であったと言えよう。(中略)曾我物語の場合には、平家物語の記事とほぼ一致しているが、さらに真済僧正の憤死の趣向などを加えている。曾我兄弟の御霊の物語に先だって、わざとそのような陰惨な事件を語ったものであろう。　(傍線は稿者による。以下同)

とある。ただ、清和天皇の系統が次代の陽成天皇で絶えた件については、作品本文に記されているわけではなく、そうした歴史的知識を併せ持つならば、祟り云々といった読み方も可能か、というところである。

「陰惨さ」「暗さ」という解釈を示すのは、村上学氏も同様である。[7]

> 曾我物語の真字本を読む人が表記の面を別として、第一印象として語るのが、その原質的な暗さ、累積された怨念と夥しい涙の量である。それは惟喬親王の位争いの挿話が平家物語「名虎」と語句的に共通箇所さえも持ちながら、敗北者惟喬の後日譚へと傾斜してゆくことから出発する。(中略)この挿話が、この後に展開してゆく原質的な暗鬱さをトーンとする本題の序曲となっていることが知られるのである。

これらの解釈と一線を画すのが、水原一氏の示す解釈である。[8]

> 『曾我物語』は巻頭に神代のはじまりから説き起し、源平二氏を武門の両輪として紹介し、源氏の由来を説き、鎌倉の右大将頼朝の礼讃に及ぶ。その源氏由来とは、清和源氏の祖清和天皇に始まるのであって、こゝに清和帝即位の物語が語られるのである。それは曾我の本流談に対しては余談ではあるが、曾我の復讐劇の時代性を決定するのが将軍頼朝であり、その頼朝を導入するための源氏由来であるから、『平家』の場合の完全な挿入(なくとも事欠かない)に比べて、かなりはっきりした位置を保っているといえる。而して源平二氏を言いながら、この詳細な清和帝の説話を挿入する事によって、明らかに源氏を重視し、それが物語全体の序章的位置にあるのであるから、いわば『曾我物語』は清和源氏物語、頼朝物語という性格を見せているといってよい。或はまた神代の事から続く世継の系譜をなぞっていると言ってもよい。すなわち、一復讐談にとどまらぬ歴史物語としての姿勢を冒頭に示しているわけなのである。(中略)すなわち位争いの、兄弟皇子の争いが、この曾我の幾世代にもわたる親族間の憎悪の歴史を導入しているのである。(中略　祐継調伏について＝稿者注)調伏呪祷の威力の恐ろしさという点で、恵亮砕脳祈祷がこの部分の導入も果たしてい

るのである。

水原氏によると、この位争い譚は、源氏の由来、清和帝誕生を語るためのものであり、こうした歴史を繙く記述姿勢を巻頭に示すことで、『曾我物語』を歴史物語として位置づけ、そのうえで、兄弟皇子の争いが『曾我物語』における数世代にわたる骨肉の争いを、恵亮と真済の法力争いが事件の発端ともいえる祐継調伏を導く話材なのであるとされる。

そこで、そもそも、『曾我物語』における位争い譚が、曾我御霊を導くような「陰惨な物語」なのかどうか、検討を加えてみたい。

惟喬惟仁の位争い譚において無念の敗北を喫するのは、あらためて記すまでもなく惟喬親王とその祈りの師であった真済僧正である。すなわち怨霊となりうる敗者はこの二人であるはずだ。そこで真名本及び真名本訓読本における両者の最期に関する記述を確認したい（引用は真名本）。

真済…依レテ之ニ信済僧正ハ不レテ及ニ破壇ニモ被レケリ死ニ思死ニ。

惟喬…依レテ之ニ朝夕ハ称名ヲ為レテ事ト寤寐ニ不レ怠ニ給ハ念仏ヲ。此念願終ニ不レシテ空シカラ、御年四十有ニケリ有余ニテ御往生一。御葬送ノ後奉レケレバ見ニ御骨一ヲ、如ニシテ仏舎利ノ皆成ニケリ青玉一ト。見ル人聞ク人是ヲ奉ニツ、恨悩一、出家シテ入ルニ菩提ニ一人、其数有ニトソ太多一承ル。此ノ世ノ帝位ハ夢ノ内ノ御栄ナリ。極楽不退ノ御楽コソ実ニ目出ク覚シカ。

真済については確かに「思い死に」すなわち憤死をしたと記されるが、惟喬親王については、朝夕念仏を事とし、ついに往生を遂げ、その遺骨は「青玉」となって見聞の衆は羨んだ、とある。一方仮名本では、

真済…これによりて、惟喬の御持僧真済僧正は、思ひじににぞうせたまいたる。

真名本同様、真済については「思ひじに」とあるが、惟喬親王の最期に関する記述はない。まして惟喬親王が怨霊化するような記述もない。籠居の様子は記すが、その最期に対する関心すらうかがえないのである。

繰り返しになるが、『曾我物語』におけるこの位争い譚は、源氏の由来を説くその冒頭に置かれるものである。真済や惟高親王が怨霊となってまで恨みを残す対象となるのは、恵亮と惟仁すなわち清和帝となるはずである。しかし、その清和帝の流れをくむ源氏、中でも源頼朝が、かくもめでたい世の中を創出した、それなのに曾我兄弟は……という物語の枠組みをもつ『曾我物語』においては、やはり、少なくとも清和帝に対する恨みは何らかの形――「惟高往生」という形で解消されておくべきなのである。(9) それが明示されているのが真名本および真名本訓読本である。

『曾我物語』に比較すると、『平家物語』の長門本や南都本には、位争いの敗者、真済や惟喬親王が、怨霊となっていく、あるいはそれを想起させる記述を見いだすことができる。長門本『平家物語』では、

惟高御祈の師、柿下の紀僧正真済は、此事を鬱しおもひて、恵良和尚の御弟子をぞとりうしなひける。

と記し、さらに、あるとき恵亮の門弟、慈念僧正のもとに、眼光鋭いぼろぼろの身なりをした老法師が訪れ、自らは真済であると名のる、悪霊となって恵亮の門弟を取り殺してきた真済だったが、慈念僧正の読経を聴聞して改心し、後に生まれ変わって師弟の縁を結ぶ、という説話が付加されている。南都本『平家物語』では、

一宮御祈ノ師真済僧正ハ、命イキテモ何カスベキトテ、飲食ヲ断チ不動明王ノ法ヲ行ヒツヽ、七日ト申ニ終ニ命終ヌ。天下ノ悪霊トゾ成ニケル。一宮ハ御恨深クシテ、北山ノ麓小野ト云所ニ籠居サセ給ケリ。

と、「悪霊」「御恨深ク」と、明言されているのである。長門本や南都本のような説話のありように比較すると、やはり『曾我物語』には、両者を怨

霊へつなげようとする意識は薄いように思われる。それは、仮名本にいたってはもはや惟喬親王の最期を記すことすらしないことからも理解できよう。もちろんこの位争い譚は惟喬の悲劇ではある。だから、そうした視点で読んでいくことを否定するわけではない。ただ、本文自体には、惟喬の悲劇がことさら強調され、それによって深く恨みを残して世を去ったというような引用はなされていないのである。

〈四〉

もう一つの問題として、位争いの競技種目の相違がある。この相違はこの説話の取り込みの意識にも関わるものであると考えられる。

以下に、真名本・仮名本『曾我物語』、覚一本『平家物語』の本文を掲げて、その位争いの様子を対照してみたい。記事内容は位争い当日に該当する。

	真名本『曾我物語』	仮名本『曾我物語』	覚一本『平家物語』
①	于レ時天安元年三月三日ニハ奉テ引二具二人ノ太子ヲ一右近ノ馬場ヘ成二行幸一。依レテ之ニ王公卿相取々ニ儀ヒ二花ノ袂ヲ一並テ二玉ノ鏕ヲ一如レク雲ノ集リ、如レニ星ノ列ル。而バ希代ノ勝事有ケル二天下ノ勇シキ見物一ニテゾ。	天安二年三月二日に、二人の御子たちをひき具したてまつり、右近の馬場へ行幸なる。月卿雲客、花の袂をかさね、玉の裙をつらね、右近の馬場、供奉せらる。この事、希代の勝事、天下の不思議とぞ見えし。御子たちも、東宮の浮沈、これにありと見へし。	同年の九月二日、二人の宮達右近馬場へ行げいあり。こゝに王公卿相、花の袂をよそほひ、玉のくつばみをならべ、雲のごとくにかさなり、星のごとくにつらなり給ひしかば、此事希代の勝事、天下の荘観、日来心をよせ奉し月卿雲客両方に引わかッて、手をにぎり心をくだき給へり。
②	一ノ宮ノ御方ノ相撲ニハ名虎ノ卿、御馬ニハ云二瀧水一ト名馬ナリ。二ノ宮ノ御方ノ相撲ニハ吉雄ノ少将、御馬ニハ云二走水一ト名馬ナリ。復タ両方ニ被レタリ置二御持僧ヲ一。一ノ宮ノ御方ニハ弘法大師ノ御弟子信済僧正是ナリ。即申ス二柿ノ本ノ紀僧正一ト。二ノ宮ノ御方ニハ山門ノ住侶恵良和尚是ナリ。何ニ況ンヤ、年来日来奉レ寄レ心ヲ月卿雲客、各ノ引二分レテ両方ニ一把レ手ヲ砕レキ心ヲ、	されば、さま〴〵の御いのりどもありける。惟喬の御いのりの師には、柿本紀僧正真済とて、東寺の長者、弘法大師の御弟子なり。惟仁親王の御いのりの師には、我山の住侶に、恵亮和尚とて、慈覚師の御弟子にて、めでたき上人にてぞわたらせ給ひける。西塔の平等坊にて、大威徳の法をぞおこなひける。	御祈の高僧達、いづれかそらくあらむや。信済は東寺に壇をたて、恵亮は大内の真言院に壇をたてておこなはれけるに、恵亮和尚うせたりといふ披露をなす。信済僧正たゆむ心もやありけん。恵亮はうせたりといふ披露をなし、肝胆をくだひて祈られけり。
③	有ケル二十番ノ競馬一ニテゾ、四番マデハ一ノ宮ノ御方勝ニケ	すでに競馬は、十番の際にさだめられしに、	既に十番競馬はじまる。はじめ四番、一宮惟

	④	⑤
リ。依テ之ニ二ノ宮ノ御使ノ走連クルコト比叡山ヘ布ツ 如ク引蝿タルガ、似タリ並タルニ櫛ノ歯ヲ。	※⑥	恵良和尚ハ其時被ケルガ焼大威徳ノ護摩ヲ、四番マデハ負セ給ヌト被シカバ聞カ、砕ク心腑肝胆ヲ余ニ、自以テ独鈷ヲ首ヲ突キ破ツヽ、取テ脳ヲ和シテ乳ニ被ケレ焼護摩ニ、大威徳ノ乗給ケル絵像ノ牛三度マデ嘶ヘケレバ、出
惟喬の御方に、つづけて四番かちたまひけり。惟仁の御方へ心をよせたてまつる人々は、汗をにぎり、心をくだきて、祈念せられける。惟仁の御方へは、右近の馬場より、天台山平等坊の壇上へ、御つかひはせかさなること、たゞ櫛の歯をひくがごとし。		「すでに御方こそ、四番つゞけてまけぬれ」と申ければ、恵亮、心うくおもはれて、絵像の大威徳をさかさまにかけたてまつり、三尺の土牛を取て、北むきにたて、おこなはれけ
喬親王かたせ給ふ。後六番は二宮惟仁親王かたせ給ふ。	やがて相撲の節あるべしとて、惟喬の御方よりは名虎の右兵衛督とて、六十人がちからあらはしたるゆゝしき人をぞいだされたる。惟仁親王家よりは能雄の少将とて、せいちいさうたえにして、片手にあふべしとも見えぬ人、御夢想の御告ありとて申うけてぞいでられたる。名虎・能雄よりあふて、ひしくとつまどりしてのきにけり。しばしあッて名虎能雄の少将をとッてさゝげて、二丈ばかりぞなげたりける。たゞなをッてたをれず。能雄又つとより、ゑい声をあげて、名虎をとッてふせむとす。名虎もともに声いだして、能雄をとッてふせむとす。いづれおとれりとも見えず。されども、名虎だいの男、かさにまはる。	能雄はあぶなう見えければ、二宮惟仁家の御母儀染殿の后より、御使櫛のはのごとくはしりかさなッて、「御方すでにまけ色にみゆ。いかゞせむ」と仰ければ、恵亮和尚大威徳の

	ル気成テ紫ノ雲ト达ケリ都ノ方ニ。斯酬テ念力ニ、後六番ハ連ケテ亦二宮ノ御方勝ニケリ。	るに、土牛をどりて、西むきになれば、南にとりておしむけ、東むきになれば、西にとりておしなほし、肝胆をくだきてもまれしが、なほゐかねて、独鈷を以て、みづから脳をつきくだきて、脳をとり、罌粟にまぜ、炉にうちくべ、黒煙をたて、一もみもみ給ひければ、土牛たけりて、声をあげ、絵像の大威徳、利剣をさゝげて、ふりたまひければ、所願成就してげりと、御心のべ給ふ所に、「御方こそ、六番つゞけてかちたまひ候へ」と、御つかひはしりつきければ、喜悦の眉をひらき、いそぎ壇をぞおりられける。ありがたし瑞相なり。	法を修せられけるが、「こは心うき事にこそ」とて独鈷をもッてなづきをつきくだき、乳和して護摩にたき、黒煙をたててひともみもまれたりければ、能雄すまうにかちにけり。
⑥	其後ノ相撲モ无ニ相違一二宮ノ御方勝ニケリ。		※④
⑦		されば、惟人親王、御位にさだまり、東宮にたゝせたまひけり。しかるに、延暦寺の大衆の僉議にも、「恵亮脳をくだきしかば、次弟位につき、そんゐ剣をふり給へば、菅丞霊をたれ給ふ」とぞ申ける。	親王位につかせ給ふ。清和の御門是也。後には水尾天皇とぞ申ける。それよりしてこそ山門には、いさゝかの事にも、「恵亮脳をくだきしかば、二帝位につき給ひ、尊意智剣を振しかば、菅丞納受し給ふ」とも伝へたれ。
⑧	依テ之ニ信済僧正ハ不テ及破壇ニモ被ケリ死ニ思死ニ。	これによりて、惟喬の御持僧真済僧正は、思ひじににぞうせたまひたる。	
⑨			是のみや法力にてもありけむ。其外はみな天照大神の御ぱからひとぞ承はる。

①の位争い当日右近の馬場への行幸の様子や、②のそれぞれの親王の祈りの師についての記述は三本ともに非常に近似している。そして競技はまず競馬から始まり、惟喬方が四連勝したところまでは共通する(③)。この時点で祈りの師同士の法力争い(⑤)に移る『曾我物語』に対して、『平家物語』は惟仁方が残る六番を立て続けに勝利すると記している。すなわちここですでに惟仁方の勝利は確定しているわけであるが、『平家物語』はなおも競技を相撲に移してその取組をつぶさに語り、惟仁方の「能雄」が劣勢になるにおよんで祈りの師同士の法力争いが記されることとなる(④～⑤)。恵亮和尚の祈祷(⑤)のすさまじさは、仮名本『曾我物語』が饒舌に語るが、記事内容としては共通する。真名本はここで相撲の勝敗を記して惟仁方の完全勝利ということを示すが、仮名本は相撲の勝敗については触れない。恵亮の祈祷を受けて惟仁方が勝利したことに続けて、恵亮礼賛の成句を記すのは、仮名本『曾我物語』と『平家物語』である。そして『曾我物語』は真済の憤死を記して惟喬親王の籠居へと続いていき(⑧)、『平家物語』は物語時間へと帰っていく(⑨)。

位争いの競技としては、競馬と相撲を取りあげながらも競馬に重点を置いた真名本『曾我物語』と、相撲に重点を置いた『平家物語』[10]と、競馬のみを取りあげた仮名本『曾我物語』ということになる。

このように対照してくると、仮名本『曾我物語』は概ね真名本の記述にのっとりながら、『平家物語』に見られる恵亮礼讃の成句を取り込んでいることが分かる。そして真名本に載る相撲の件を省いている。稿者はここに、仮名本の説話取り込みの意識をみたいのである。

ところで、この、相撲か競馬かということについては、水原一氏、小峯和明氏らにご指摘がある。水原氏は、『平家物語』について「すでに競馬にはっきり出た勝敗率は軽視されるという不合理」を指摘し[11]、小峯氏は、競馬の「四対六」というスコアが恵亮砕脳による効験とかかわることは確実だとしたうえで、「競馬と相撲が共に恵亮の修法と対応する闘諍録、長門本、妙本寺本系の方が構成面からみて自然であり、より本来の形をとどめていると考えられよう。」とされる[12]。また、『平家物語』が相撲の方に力点を移行させていった理由として、「競馬が数の上での緊張をはらむだけで場面性をもちえない」こと、相撲の「力と力の激突による、写実性」の獲得しやすさと併せて、『今昔物語集』や『古今著聞集』に見える相撲譚強力譚の流布との関連も指摘される。もちろん両氏ともに、この位争い自体を実証しようとするものではなく、説話としての整合性についてのご指摘である。

競馬と相撲が両方行われるのが本来の形であるとして、仮名本が真名本にはあった相撲の件を排除したことについては、どのように考えるべきであろうか。それは、仮名本の改作者の説話の再構築によるものである。仮名本は、すさまじいまでの恵亮の祈祷を描く。そしてその効験は直ちに競馬の勝敗に表れた。ここに蛇足のごとき相撲の勝敗を配するよりも、これぞ世に言う「恵亮砕脳」であるとでも言うように、恵亮礼讃の成句――周知の成句――を引用するのである。恵亮の祈祷が勝利に直結している、非常にわかりやすい話の展開に整理されていると言ってよい。ただ、この成句を引用することによって、仮名本における当該説話の意味合いは少なからず変化を遂げた。真名本で、敗者惟喬の悲劇とそれを超越した往生を語るものだったものが、勝者恵亮への讃辞で位争い自体を総括してしまうと、敗者の後日談は付けたりでしかない。仮名本が惟喬の往生まで筆を割かないのは、このことと無関係ではないはずだ。

また、仮名本は、『平家物語』に見られる恵亮礼讃の成句を取り込みながら、競技に競馬を選んだのはなぜだろうか。稿者はかつて仮名本『曾我物

語』の説話の取り込みについて考えたことがある。[13] そこでは、仮名本『曾我物語』が、同じ説話を取り込む他作品――主に軍記文学――といかに異質な引用の方法をとるかということを指摘した。例えば『太平記』などでも知られる「呉越の戦い」の説話を、『太平記』とは異なる独自の解釈によって引用する仮名本の方法である。つまり、『平家物語』の「名虎」で知られるような、その勝敗が主として相撲によって決定する位争い譚を、ヴァリエーション違いで引用するところに仮名本の説話取り込みの方法があるのである。[14] それと同時に、金言成句を貪欲なまでに取り込んでいくという仮名本の方法がある。この位争い譚の取り込み方は、これら二つの方法をともに満たしていると言ってよいのである。

〈五〉

以上、惟喬惟仁位争い譚のヴァリエーションの比較検討を通して、仮名本『曾我物語』の説話取り込みの方法を考察した。

そもそも『曾我物語』における本説話の位置づけは、『平家物語』の「天照大神の御ぱからひ」といった運命観を示すものではない。惟喬が位争いに敗れたことは悲劇的な逸話ではあるが、惟喬の悲劇とその往生は、源氏の祖となる清和帝に無常を悟らせるものとして埋め込まれ、その末裔である源頼朝にいたる源氏の代々を紹介する端緒として位置づけられている。こうした枠組の中で、仮名本は、真名本にみられた位争いに競馬を重視するという『平家物語』とは異なるヴァリエーションを活かしながら、同時に、『平家物語』で知られるこの説話の話末評、「恵亮砕脳・尊意振剣」をも取り込んでいることが確認できた。そしてこの説話取り込みの方法が、仮名本『曾我物語』の方法であることは認められてよいのである。

なお、当該説話において相撲を排除したのは、仮名本独自の改作なのかということは確認しておかなければならない。現時点での調査範囲では、競馬のみで位を争ったとするヴァリエーションは見出せていない。[15]『神明鏡』[16]が「相撲又競馬也」としながらも、競馬に重点を置き、相撲の勝敗について触れないという点で類似しているが、両書の関係については今後の検討課題としたい。

[注]

1 富倉徳次郎氏著、中巻、角川書店、昭和42年。

2 水原一氏「惟喬・惟仁位争い説話について(上)―軍記における傍流談の考察―」(『駒沢大学文学部紀要』33、昭和50年3月、『中世古文学像の探求』(新典社、平成7年)に再録)、同「惟喬・惟仁位争い説話について(下)―軍記における傍流談の考察―」(『駒沢国文』12、昭和50年2月、『中世古文学像の探求』に再録)。

3 黒田彰氏「惟喬外伝―平家、曽我、古今注―」(『千里山文学論集』38、平成元年3月、『中世説話の文学史的環境 続』(和泉書院、平成7年)に再録)にご指摘がある。

4 小峯和明氏「位争い説話から真済悪霊譚へ―説話の歴史―」(『日本文学』24-12、昭和50年12月)。

5 本表は、前掲注2論文(下)記載の表に基づいて作成した。なお、使用したテキストは次の通り。以降の本文引用も同様で、必要に応じ濁点等を付した。

『曾我物語』
真名本……『妙本寺本曾我物語』(角川書店、昭和44年)
真名本訓読本…新編日本古典文学全集『曾我物語』(小学館、平成14年)
仮名本……日本古典文学大系『曾我物語』(岩波書店、昭和41年)

『平家物語』
延慶本……『延慶本平家物語　本文篇上下』(勉誠社、平成11年再版)
長門本……『長門本平家物語』翻刻(勉誠出版、平成16～18年)
闘諍録……『内閣文庫蔵源平闘諍録』影印版(和泉書院、昭和55年)
盛衰記……『源平盛衰記慶長古活字版(一～六)』影印版(勉誠社、昭和52～53年)

南都本…………『南都本・南都異本平家物語（一・二）』影印版（汲古書院、昭和47年）
屋代本…………『屋代本平家物語（貴重古典籍叢刊9）』影印版（角川書店、昭和48年）
覚一本…………『日本古典文学大系・平家物語（上下）』（岩波書店、昭和35年）
なお、長門本と闘諍録は、先の表に示したように、競馬と相撲が対等に、ほぼ同時に行われており、修法の効果がそれぞれの結果に反映されている。

6 日本古典文学大系『曾我物語』（岩波書店、昭和41年）、補注五「惟喬・惟仁の位あらそひ」項。

7 「真字本と仮名本のストーリー構造」（『曾我物語の基礎的研究』（風間書房、昭和59年）所収）。

8 前掲注2論文（下）。

9 会田実氏「鎮魂の位相―曾我物語の基底から―」（『国文学研究』102、平成2年10月、『曾我物語』その表象と再生』（笠間書院、平成16年）に再録）にも同様のご指摘がある。

10 先の表に整理したように、『平家物語』諸本間でも長門本・闘諍録は競馬と相撲をほぼ同等に扱い、延慶本は相撲のみを取りあげる。本稿では、仮名本の説話の取り込みを検討するべく語り本（覚一本）と対照したが、延慶本がなぜ競馬について触れないのかも検討する必要がある。

11 前掲注2論文（下）。

12 前掲注4論文。

13 拙稿「仮名本『曾我物語』巻五・六末尾の説話群について」（『説話文学研究』34、平成11年5月）。

14 このことについては黒田彰氏は、前掲注3論文の注③で、

　ただ、平家が相撲を重視するのに対し、曾我が競馬に力点を置く（真名本では軽く添えられる。仮名本では競馬のみ）ことについては、曾我が、同じ巻一の中に河津三郎等の相撲の場面を据える構想との関連上、重複を避ける作為に出たのであろう。

と指摘されている。ただし、仮名本『曾我物語』に、重複を避ける作為が認められるのか疑問は残る。前掲注2の水原氏の御論考に従えば、相撲によって運命が変わっていった惟高親王の話は、河津三郎の相撲を導くものとして恰好であったのではなかろうかとも考えられるからである。

15 毘沙門堂『古今集注』や『職原抄聞書』などが挙げられるが、いずれも相撲の勝敗が問題とされている。

16 『続群書類従』雑部。群書解題には「南北朝末期には成立していた」とあるが、仮名本『曾我物語』との先後関係も検討されるべきであろう。

【付記】

　本稿は延慶本注釈の会の担当（平成18年7月1日）および筑波大学国語国文学会第三〇回大会（平成18年9月30日）における口頭発表をもとにしたものです。それぞれの席上でご教示をいただいた方々に感謝申し上げます。

（こいど　もりとし　昭和学院短期大学人間生活学科　助教授）